国際地域研究論集（JISRD）第３号（№３）2012

研究ノート

朴花城の長篇小説『峠を越えれば』について

A Study of Park Hwa-seong's "Kogaereel neomeemyeon"

山田　佳子*

YAMADA Yoshiko

1　はじめに

朴花城（1903 - 1988）の長篇小説『峠を越えれば』は1955年9月から1956年4月にかけて『韓国日報』に連載され、1959年には映画化されるなど、大衆的な人気を集めた作品である。6人の若い男女の恋愛模様を主人公の「出生の秘密」と絡めて描いた波乱に満ちた展開は、現在の「韓流ドラマ」さながらであり、人気の理由がうかがえる。登場人物はこの6人の若者とその家族にほぼ限定されており、物語自体は当時の韓国社会の一部の上流階級で起きたきわめて個人的なできごとで構成されている。

ところで朴花城はこの作品から悪人や醜悪な場面を意図的に排除し、「誰もが安心して読むことのできる話を創作しつつ、堅実な考え方と真の理想をもって進む健全な人々の生き様を見せようと努力した[1]」という。すなわち朴花城はこの作品を通し、私利私欲にまみれた人間模様ではなく、本稿で見ていくように、正義感と情熱にあふれ、国のために身を捧げる健全な若者たちの生き様を描こうとしたのである。

しかし主人公の「出生の秘密」をめぐって、過去と現在を行き来しながら繰り広げられる男女の恋愛のストーリーと、国のために身を捧げる「健全な若者の生き様」という一見して異質の二者が、必ずしもうまく調和している

* 新潟県立大学国際地域学部 (yamada@unii.ac.jp)

08_Yamada.indd 125 12.3.21 3:28:17 PM

とは言えない。たとえ上流階級に属する善男善女が主人公の健全なストーリーであるにせよ[2]、読者の興味を引き付けてやまない男女の複雑な恋愛模様を展開しながら、その所々に挟み込まれたエリートたちによる学識の披露は、ともすれば演説調になりがちで、啓蒙的な印象を与える。また、朴花城は1925年に「秋夕前夜」で登壇して以後、日本の植民地統治下では主に女工や農民の生に焦点を当てたプロレタリア文学傾向の作品を発表しており、そのことと比較すると、「峠を越えれば」における人物設定は対照的であると言える。

このように『峠を越えれば』は構成上の不自然さを含め、朴花城の作品としては異色の感がある。しかしその反面、登場人物たちの考え方や行動を通し、朝鮮戦争直後の韓国社会の様相、および当時の朴花城の思想を検証することができるのも事実である。したがって本稿では朴花城の意図した、「堅実な考え方と真の理想をもって進む健全な人々」、なかでも若者の人物像に着目し、朴花城がこの作品を書くに至った作家意識と、その背景を探ってみることにする。

2　「出生の秘密」が明かす過去の歴史

『峠を越えれば』は場面の随所に日付が示されており、作家が場面の時間的な順序にかなり気を使っていたことがうかがわれる。実際、主人公の「出生の秘密」が明かされる過程で、誰が秘密を知っていて誰が知らないのか、いつ漏れたのか、といったことに正確を期すためには時間的な整合性が不可欠である。しかし作家が日付を示した理由はほかにもある。

物語はある年の6月に始まり、翌年の4月に終了する。それが何年のことであるかが明確に示されているのは、「甲午の年の大きなカレンダーの上に、子牛まがいの白い羊が描かれた乙未の年の新しいカレンダーを掛けた[3]」という下りである。それによりこれが1954年6月から1955年4月にかけての話であることがわかる。また、日付と曜日の記述にも食い違いがなく、その年のものと一致する。さらに、「今度の5・20選挙[4]」や、「光州学生事件25周年[5]」などと時事的な出来事にも言及している。つまり、朴花城はこの作品を単なる男女の恋愛の物語ではなく、現実の社会と密接につながった話として描こうとしたのである。

『峠を越えれば』の主人公ソリはソウルのE大学英文科に在学中の22歳の女子学生で、父親はすでに死亡している。近くにある本家にはソウル大学工

08_Yamada.indd 126　12.3.21 3:28:17 PM

科大学院に通う従兄のジンスと、Ｙ大学政治外交科に通う従妹のヘスンがいる。また、ソリの同級生で光州出身のヨンオクには同郷の友人男性で、法科大学院生のヒョンビンと医科大学院生のチョルグがいる。この女子大学生と男子大学院生3人ずつの6人はスタディーグループを結成し、隔週土曜日に集まって互いの専門分野についての話を交わすようになる。

6人はまもなくソリとチョルグをはじめとする3組のカップルにまとまる。しかしソリの祖母が臨終のさいに語った言葉をきっかけにソリの「出生の秘密」が明らかになるにつれ、男女の恋愛の物語は過去に遡っていく。そしてソリが本当は自分の実の娘だと打ち明けるチョルグの父の衝撃的な告白に至って読者の興味は最高潮に達する。ここからチョルグの父の過去へと話が展開する[6]。

チョルグの父は高等普通学校在学中、光州学生事件を主導したかどで1年間服役した。そのとき新幹会の幹部で、熱烈な民族主義者だったというチョルグの祖父は光州刑務所で獄死した。その後、チョルグの父は弁護士の援助でソウルの医科専門学校に進学することができたが、その恩から弁護士の娘と20歳にして意に沿わない結婚をし、21歳で息子チョルグの父となった。当時、彼は故郷に妻子を残してソウルで下宿をしていたが、その下宿屋の娘と相思相愛の仲だった。その女性がのちにソリの母となる人物である。

これが単なる通俗的な恋愛の物語でない所以は、ソリの産みの母はまた別の女性だという事情と、ここからまた若者たちの新たな物語が始まるという点にある。チョルグの父の過去の行為はどんな事情であれ倫理的には決して許されるものではないのだが、作家はそれを問うてはいない。そればかりか彼は愛国者として、やはり光州学生事件に関与したヨンオクの父とともに、事件25周年の式典で表彰もされる。また、産みの母と育ててくれた現在の母、それにチョルグの母の立場に同情するソリに対し、チョルグは「少年独立運動家の政治的な鬱憤！ 家庭の不幸！　愛の失敗！ そのすべての隘路を克服し、むしろ堂々と生きてきた父のことを、同情し、そして尊敬すべきだ[7]」と言って説き伏せるのである。つまり朴花城はチョルグの父の過去を描くことを通じて、若者たちが直接知り得ない過去の歴史と、その時代を生きた人々の足跡を蘇らせ、現在の社会が過去の人々の努力と犠牲の上に成り立っていることを強調しているのである。

08_Yamada.indd 127 12.3.21 3:28:18 PM

3　新たな時代を切りひらく若者の生き様

前章で見たように『峠を越えれば』は1954年から1955年にかけての韓国を舞台に、上流階級に属するエリートの若者6人の恋愛模様を、彼らの親の若い時代にまで遡って描いている。その過程で作家は親世代の愛国的行為に言及し、その世代の残した業績を強調している。

しかしチョルグの父やヨンオクの父らはあくまで過去に属する人物である。例えば、同志の関係で結ばれた彼らは互いの子どもたちの結婚を2人だけで決めていたが、当の子どもたちは男女交際を自由に楽しみ、親の意のままにはならなくなっている。また、チョルグはソリの誕生に至った父の過去の行動を決して否定はしていないものの、一方で「我々の過去がどれほど価値あるものであろうと、またそうでなかろうと、過去はもう教訓あるいは体験の肥料以外の何物でもない[8]」と、過去は過去にすぎないと語っていることからも、戦後の新たな時代を切りひらくのは現代の若者たちであるという作家の期待と確信が読み取れる。ここでは朴花城が若者たちに何を期待し、その背景に何があったのかを、当時の韓国社会に目を向けながら見ていく。

作家は6人の若者のうち、男性3人を裕福な大学院生に設定した。それは兵役を考慮し、また学費の心配をすることなく専門的な学問に打ち込むことのできる環境を用意するためであったという[9]。3人の男子大学院生はそれぞれ、ジンスが電力、チョルグが細菌学、ヒョンビンが法律を専門にしている。3人はスタディーグループの会合で互いの専門分野についての学説や自身の研究について披露する。作家はその部分を執筆するのに「現地踏査はもちろん、専門分野の権威者を訪ねて講義を聴き、また専門書を読んで消化するのに無限の精力と情熱を傾けた[10]」という。このことから、物語の展開に多少の違和感を与えているとはいえ、それらの専門的な話を語る人物の設定に作家がかなりの力を傾けたことがわかる。

3人のうち、作家が最も有能な人物として期待を込めて描いているのはジンスである。ジンスは年齢も最も高い26歳で、助教として高電圧と電子学の講義も担当している。物語の進行中には停電が頻繁に起こるのであるが、これは当時の電力不足の状況を表しているようである[11]。作品中、ジンスがスタディーグループの会合で解説を繰り広げる韓国の電力事情は発電所不足の実態から、日本とアメリカの発電事情にまで及ぶ具体的なものである。アメリカはすでに原子力発電の段階に入っているが韓国ではまだ夢であること、しかし近い将来には実現するだろうとの期待を込めた予測などは興味深い。

08_Yamada.indd 128　12.3.21 3:28:18 PM

ジンスは唐人里、三陟、華川などの発電所の視察にもたびたび出かけている。建設中の三陟へは外国の技術者による工事の様子を見学に行き[12]、華川発電所ではたまたま遭遇した主変圧器の故障の現場で、国内の技術者たちとその修理に携わる。そして国内の技術者のみでそうした作業をやり遂げたのは史上初の快挙だとして大きな自信を得る[13]。当時の韓国には技術の蓄積がなく、資本も技術もアメリカの援助に頼らざるを得なかったという事情などを背景としたエピソードである。

また、ジンスは国内の技術者の世代交代が進まないことも問題視している。無能な年長者が給料だけを目当てに居座っているため優秀な若手のポストがなく、新しい技術の導入が進まないのだという。華川での経験をもとに書いた修士論文が評価され、学会から海外留学の推薦を受けたジンスが、敢えて国内で働くことにこだわって「大韓電業会社[14]」に就職するのも、そうした現状に風穴を開けようとの意欲からである。ジンスは「留学病」にかかった若者たちが祖国に背を向け、ひたすらアメリカへ行こうとすることを、「名誉と虚栄に浮かれ、ひとたび行けばよその国の高級な生活に憧れて真似をしたくて、自国の悲惨な現実には目をつぶろうとする[15]」と批判もする。このように自らの立場と責任を自覚し、国の発展のために尽くそうとするジンスを通し、作家の意図した理想的な若者の生き様を見て取ることができる。

一方、ヒョンビンは「考試行政科第3部[16]」に合格し、外交官を目指してハーバード大学政治科へ留学する。外交官になるのであれば留学も当然であろう。彼はスタディーグループの会合で国際法と国内法の関係、国連安保理における常任理事国の拒否権の問題点、海洋主権などについて解説する。1952年に宣言された「李承晩ライン」についても言及している。ヒョンビンの父は1954年5月20日の第3代民議員選挙[17]で当選した国会議員であるが、物語に直接登場はしない。しかしヒョンビンは父親が国会議員であることについては、厄介な留学手続きが簡単に済むというような便利な点があるくらいにすぎないと皮肉り、国会の堕落ぶりを痛烈に批判する。

また、細菌学を専攻するチョルグは細菌とウイルスの違いについて解説する。その中で細菌学が抗生物質の発達によって研究が進んだのとは異なり、ウイルス研究は未開拓の分野だとしたあと、ウイルスを人間にたとえ、「国家を蝕み、社会を蝕み、学園を蝕み、家庭を蝕む[18]」「ウイルス的人間の存在[19]」は国家と社会にとって百害あって一利なしと権威主義を切って捨てる。その後、チョルグは学会発表を前にして自身がウイルス性の「原発性非動性肺炎[20]」にかかってしまう。それでも熱を押して学会で研究発表をするという下

08_Yamada.indd 129 12.3.21 3:28:18 PM

りは、ウイルスと果敢に闘うチョルグの姿を表現しているように読める。

以上に見たように、3人の男子大学院生は物語中に数回、場面設定されているスタディーグループの会合においてそれぞれの専攻分野についての解説を繰り広げる[21]。その内容は作家自身の言葉によれば、現地踏査や専門家の講義、専門書籍を通じ、最大限の精力と情熱を傾けて得た知識である。すなわちそれらは当時の韓国における社会的な関心事項であるとともに、なにより朴花城がその分野に強い問題意識を持っていたことがうかがわれる。

4　朴花城の民族意識と明かり

朴花城は登壇作の「秋夕前夜[22]」において木浦の夜の風景を次のように描写している。

> 陰暦八月十四夜の月が東の空に高く昇った。電灯が光る街はさらに月明かりを受けて瓦屋と草葺屋根が見え隠れする。儒達山は星を散りばめたように赤い目がきらめいている。空に星、街に電灯、山麓にランプ、三つの玉が夜の光の中でそれぞれに輝いている[23]。

空には星、市街地には電灯[24]、儒達山の麓にはランプの明かりがそれぞれに輝いている夜景は一見美しい。しかしその風景は昼間見れば一転する。「儒達山の麓を見れば、岩の間に穴を開けただけの、豚小屋のような掘建て小屋が山を覆い、完全なる貧民窟[25]」なのだとする。電灯とランプの明かりが照らし出す家々は遠目に見れば区別がつかずとも、その差が歴然たるものであることを暗示している。1897年に開港した木浦は埋立地に計画的に日本人居留地が整備されたのとは反対に、朝鮮人が住む儒達山の麓は墓場の跡地であったという[26]。

「新婚旅行[27]」においては「儒達山の中腹にきらめく明かりは、そよ風にも消え入りそうに沈みこんで体を震わせているようだった[28]」と、夜の儒達山に石油ランプがはかなくゆらめく様子を表現している。作家は電灯とランプの明かりの違いによって、資本家や商人の生活水準と貧民層のそれとがいかにかけ離れたものであるかを表しているのである。

「新婚旅行」ではさらに、明るい繁華街に立ち並ぶカフェと、路地の暗闇にある「木浦青年会館[29]」の廃屋を対比させ、植民地権力の弾圧によって青年運動が挫折してしまったことに対する無念の思いを表現している。しかし

08_Yamada.indd 130　12.3.21 3:28:18 PM

「酒と女の商売が木浦ほど繁盛しているところは恐らく朝鮮全土のどこにもないだろう[30]」という登場人物の言葉からは、作家が木浦の明るさを必ずしも肯定的にとらえてはいないことが読みとれる。また、「崩れた青年会館[31]」では廃屋の前に立ち、今は亡き兄がかつて青年会館で演説をしたときのことを思い浮かべ、自ら運動に参加することを誓った女性主人公が、獄中にいる革命家の夫にその決意を伝えるために旅立っていく様子を描いており、火の消えた青年会館が逆に力を呼び起こさせる役割をしている。

当時の若い朴花城には電灯をはじめとする文明によって故郷の木浦が発展していくことを好ましく思う気持ちも混在していた。それは「秋夕前夜」において湖南線の発着駅である木浦駅についての、「一日に四本の汽車が行き来する停車場を中心に朝鮮人と日本人の商店が立ち並ぶ中央は、朝鮮屈指の都会と呼ぶにふさわしく[32]」のような肯定的な表現からもうかがえる。しかし植民地統治下にある朝鮮の作家としての朴花城の民族意識は、電灯とランプの違いを不当な差別としてとらえながらも、民族を弾圧する植民地統治者のもたらす文明や、それによる発展を進んで受け入れることには懐疑的な面もあったはずである。

時代が移り、『峠を越えれば』においては電力の問題が大きな時事的関心事として扱われている。ジンスが「現代では産業面における生産能率と発電能率とはほとんど正比例している[33]」と語るように、深刻な電力不足に陥っていた当時の韓国においては産業発展のための電力の確保が「何よりも急務[34]」だったのである。この電力不足の原因については前に述べたとおりであるが[35]、1948年5月に北側が華川発電所の一方的な断電を決行するに及び、駐韓米軍司令官によって設けられていた「電力非常委員会」は節電や電力使用権に関する様々な対応措置を実施した[36]。その結果、中小企業ほど多くの制約を受け、工業生産額の低下をもたらしたという[37]。さらに朝鮮戦争でも甚大な被害を受けた[38]。朴花城の夫が経営していた工場にも当然、被害は及んだであろう。自伝『吹雪の銀河』には電力不足に関する言及はないが、朝鮮戦争を前後して夫の工場の資金繰りが悪化していた様子を確認することができる[39]。当時、40代後半の主婦として夫とともに一家を支える立場にあった朴花城にとって、このころの苦労はより現実的で具体的なものであったものと推測される。

『峠を越えれば』では「出生の秘密」を知り、産みの親に対する愛情と、育ての親に対する愛情との間で葛藤するソリを、チョルグが「親や兄弟よりも正義と民族のほうが大切だ[40]」という言葉で諭す。チョルグはさらに続けて、第２次大戦中、ナチの党員だった弟に銃を向けた兄の話を例に挙げなが

08_Yamada.indd 131 12.3.21 3:28:18 PM

ら、「血縁関係というものは朝鮮戦争のさいにすでに一度崩れ去った[41]」と語る。チョルグのこの意味深長な言葉に作家の新たな民族意識を読み取ることができる。それは植民地統治からの解放、南北分断、民族間の戦争という曲折と困難を経験するなかで芽生えた韓国国民としての意識である。このとき国の発展を願う気持ち、なかでも産業の発達とその根幹を担う電力に寄せる期待は当然のことながら、日本の統治期とは異なり、直接的なものである。作家が最も有望な人物として描いたジンスが海外留学を拒否し、大国に頼らずに国内の技術を発展させようという希望に燃える若者であるという点は注目すべきである。

5　おわりに

朴花城は『峠を越えれば』において、上流階級に属するエリートの若者たちの恋愛模様を主人公ソリの「出生の秘密」と絡めて描き、彼らの親世代の愛国的な行為に言及しながら、現在の社会がそうした過去の上に成り立っていることを示した。そのうえで、朝鮮戦争後の新たな韓国の発展を担うのは彼ら若者たちであるとの期待と確信のもと、理想的な若者の人物像を提示した。

作品の中では停電が頻繁に起こるなど、作家は当時の電力不足の事情を伝え、電力を専門とするジンスの人物形成に最も力を注いでいる。産業の発達を担う電力事情の改善なくして国の発展は望めないからである。のみならず、外交官を目指すヒョンビンや、医学を研究するチョルグについても作家はジンスに劣らぬ期待を寄せ、彼らの専門分野について詳細に記している。

『峠を越えれば』は彼らエリートたちが繰り広げる恋愛の物語でありながら、男子大学院生たちによる電力や国際関係、医学についての解説の場面にもウェートが置かれ、啓蒙的な印象を加えている。作家はそれらの専門的な知識の吸収に並々ならぬ力を傾けていることから、作品としての自然さよりも、知識の伝達を優先させたように思われる。そこには大国の援助や支配から脱し、国際関係において対等の立場に立とうという韓国国民としての矜持が透けて見える。

朴花城は日本の統治下ではプロレタリア文学傾向の作品を書き、民族としての自覚を促す態度を示した。そうした作品においては階級思想への啓蒙の要素が確認される。「坂道」「新婚旅行」などを例に挙げることができる。これらの作品の民族意識を韓国国民としての意識に置き換えたものが『峠を

08_Yamada.indd 132　12.3.21 3:28:18 PM

越えれば』であると言うことができるのではないか。また、現場取材に基づく執筆も、「洪水前後」「故郷のない人々」などの作品にとられた方法である。このように見ると、『峠を越えれば』には朴花城の執筆スタイルがそのまま維持されていると言える。この点に関してのさらなる分析と研究は今後の課題とする。

注

1　朴花城「後記 - 峠を越えて」、『峠を越えれば』（『朴花城文学全集』第3巻、プルン思想社、2004）、p.556。
2　連載中、朴花城は読者から「善男善女ばかりを登場させるな」という叱責を受けたという（同上）。
3　朴花城『峠を越えれば』、『朴花城文学全集』第3巻（前掲）、p.312。以下、『峠を越えれば』からの引用は全て同全集に拠り、頁数のみを記す。
4　上掲書、p.48。1954年5月20日に実施された第３回国会議員選挙のこと。李承晩の自由党が大統領終身制への改憲のためにあらゆる不正を行った。
5　同上、p.222。
6　徐正子はこの作品で注目される人物としてチョルグの父を挙げ、朴花城は自身が解放前に持っていた同伴者的作家意識を、彼の民族意識に投影したとしている（徐正子「朴花城の作品世界」、『朴花城文学全集』第3巻、p.565）。
7　朴花城『峠を越えれば』、p.546。
8　同上、p.495。
9　朴花城「後記 - 峠を越えて」（上掲）、p.555-556。
10　朴花城『吹雪の運河』、『朴花城文学全集』第14巻、p.300。
11　日本の植民地統治からの解放後、それまで総督府が管理していた水力中心の発電施設は朝鮮に引き渡された。しかしその多くは北側にあり、補助的な目的で設けられていた火力発電所はかなり老朽化していて、わずかな発電能力しかなかったという。そうしたなか1948年5月14日に北側が一方的に行った華川発電所の断電措置による影響は深刻であった。その後も朝鮮戦争で施設が被害を受けるなど、電力難が続いた（小林英夫・李光宰『朝鮮・韓国工業化と電力事業』、つげ書房新社、2011、p.182。『韓国民族文化大百科事典』第25巻、韓国精神文化研究院、1991、p.354）。
12　三陟火力発電所は1955年2月にアメリカの資金援助を受けて１号機の建設に着工し、1956年5月に竣工した。当時としては最新の設備をもっていた（『韓国民族文化大百科事典』、上掲、第11巻）p.419。
13　華川発電所は38度線以北に位置するため、南北分断後は北側の管理下に置かれたが、朝鮮戦争の休戦ライン設定時に韓国側に入り、その後、アメリカの援助により復旧工事が進められた（同上、第25巻、p.354）。
14　朴花城『峠を越えれば』、p.530。参考だが、韓国では1961年に韓国電力（株）に統合されるまで「朝鮮電業（株）」「京城電気（株）」「南鮮電気（株）」の3社が電力事業を行っていた。このうち「朝鮮電業（株）」は総督府の主導の下で「電力管理令」に基づいて設立された特殊会社で、朝鮮内の発送電設備の大部分を管理・運営していた（小林英夫・李光宰、前掲書、p.178）。
15　朴花城、前掲書、p.272。
16　朴花城、前掲書、p.125。国家公務員試験。この名称は1960年代初頭まで行われていた制度に基づく（『韓国民族文化大百科事典』、上掲、第24巻、p.612）。
17　注4参照。
18　朴花城、前掲書、p.160。
19　同上、p.161。

08_Yamada.indd 133　12.3.21 3:28:19 PM

20　同上、p.453。この病名については明らかにできなかった。作品中では「ＵＮ風邪」、「戦後風邪」（p.456）とも言い換えられており、1957年前後に流行したアジア風邪のことではないかと推測されたが、作品の連載時期はそれより前である。
21　女子学生３人も才媛という設定であるが、あくまで聞き役に徹しており、自らの研究について披露する場面はない。
22　朴花城「秋夕前夜」、『朝鮮文壇』1925.1。
23　朴花城「秋夕前夜」、『朴花城文学全集』第16巻、p.32。
24　朝鮮に初めて電気が登場したのは1884年だとされる。ほとんどが電灯用で、発電は火力が中心であった（小林英夫・李光宰、前掲書、p.32～34）。
25　朴花城、前掲書、p.32。
26　コ・ソッキュ『近代都市木浦の歴史・空間・文化』、ソウル大学校出版部、2004、p.19。
27　朴花城「新婚旅行」、『朝鮮日報』1934.11.6 - 21。
28　朴花城「新婚旅行」、『朴花城文学全集』第16巻、p.189。
29　木浦青年会館は木浦の青年運動の活動拠点として1925年に建設されたが、警察の弾圧強化とともに運動が衰退すると、建物も放置されるに及んだ（コ・ソッキュ、前掲書、p.217～221参照）。
30　朴花城、前掲書、p.190。
31　「崩れた青年会館」は『青年文学』1934年創刊号に掲載される予定だったが、検閲により掲載不可となった。編集人であった金八峯はその原稿を保管し、植民地統治からの解放後、朴花城に返却したという（『朴花城文学全集』16、p.164脚注参照）。
32　朴花城「秋夕前夜」（前掲）、p.33。
33　朴花城『峠を越えれば』、p.52。
34　同上、p.275。
35　注11参照。
36　その内容は家庭用60ワット電球の30ワットへの交換、サマータイムの実施、電力の夜間と週末の利用奨励、夜間外出令の厳守、氷・塩などの夏期産業への電力使用の優先権付与、大動力部門に対する優先的配電などであった（小林英夫・李光宰、前掲書、p.184）。
37　同上、p.185。
38　発電施設の41％、送電施設の22％、配電設備の30％、変電設備の60％が破壊もしくは被弾したとされる（同上、p.222）。
39　朴花城『吹雪の運河』（前掲）、p.290～293。
40　朴花城『峠を越えれば』、p.215。
41　同上、p.219。

08_Yamada.indd 134　12.3.21 3:28:19 PM